

美作の狛犬（1）津山市

田渕千香子

はじめに

神社を訪れると参道脇などにちょこんと、犬のような猫のような形をした石造物が座っている。狛犬である。均整のとれた美しい姿形をしたものから、脅迫的な怖い顔をしたもの、奇怪で怪しげなもの、おとぼけてユーモラスなものまで様々な面相をしている。大きさも50cm程度のものから170cmを越すようなものである。時代や地域、寄進者と石工の思考などで形づくられる様々な表情には、その背景にある歴史や人々の営みを表現しているように見受けられる。

狛犬は聖なる場所を守護するための靈獸で、左右一対で置かれる。平安時代は木造で神殿の内部に置かれた。当時の狛犬には双方に外見の違いがあり、口を開けているのが「獅子」、口を閉じて角が生えているものが「狛犬」とはっきりとした違いがあった。しかし、時代が下るに連れて双方の違いがなくなり、狛犬が獅子化して現在にみられるような「獅子・狛犬」の形が定着していったようである^{註1}。

江戸時代以前は、国司や守護などの土地の有力者が奉納していたが、それ以後は氏子、商人、町人などが競って寄進するようになり、現在、神社の参道でみられるような狛犬が全国に広がっていった。それに伴い

狛犬は、本殿の内部から外に出て神社を守るようになり、材質も木製のものから風雨に強い花崗岩、凝灰岩、砂岩などの石製へと変わっていった。現在では、陶製、瓦質、コンクリート、樹脂などで造られた狛犬もある。江戸・明治・大正・昭和・平成と時代の変化を見つめてきた狛犬は、時代が変わり訪れる人もまばらになり、風化の一途をたどっている。この状況は狛犬に限らず、神社境内の鳥居、灯籠、玉垣、手水石などの他にも、地神塔、道標、五輪塔など道端で見かける石造物にも及び、その存在の意味さえ知る人は少なくなってきた。先祖が残してきたものを忘れ去り、その上に暮らしていくことが豊かな生活といえるのだろうか。変化する時代を生き抜いてきた石造物を、次代に伝えていくことの重要性を改めて感じさせられている。

今回、市内154社の神社を巡り、狛犬が確認できたのは67対である。しかし、まだ巡っていない神社が多数あるため、今後、さらにその数は増えるものと思われる。小稿では67対の狛犬を年代、石工銘、姿形、材質などから大阪の狛犬・出雲型・尾道型・岡崎型の4タイプに大別した。以下、それぞれのタイプの特徴と変遷について検討することにする。

註1 上杉千郷『狛犬事典』戒光出版 2001年



阿形



吽形

(イラスト提供：田渕智也)



写真1 中山神社（一宮） 石工・泉州住石工小鯛市兵衛 明和元年（1764）
写真2 八幡神社（阿波） 石工・泉州貝掛村住人里山源助 弘化2年（1845）

写真3 八坂神社（近長） 石工・大阪石工石光 明治31年（1898）
写真4 金刀比羅神社4（加茂中原） 石工・泉州貝掛住里山源助 年代不詳

大阪の狛犬

大阪の狛犬

江戸時代後半の明和元年（1764）に奉納された一宮の中山神社神門前の狛犬を最古とする（写真1）。台座には、石工名「泉州住石工小鯛市兵衛」が刻まれている。この狛犬が奉納された時代は、全国的にみても狛犬の全盛期であり全国各地で様々な狛犬が造られ奉納された。市内では、この狛犬が奉納された時期から明治の終わりまでは、大阪の狛犬が大半を占める。

この時代のものは個性が強く、それぞれが独特な形をしている。それは、美作全域でも同じ状況にある。大阪の狛犬は、色々な姿形をしているため、分類することは容易ではない。さらに、大阪の石工の名前が銘記されていても型式は他のものを踏襲しているものも

あり、一概にタイプを断定することは難しい。しかし、上を向いた横広の鼻、垂れ耳、花崗岩製のものが多いなどの特徴をあげることができる。姿勢は座形（蹲踞の姿勢）が基本で、顔は縦長や丸顔で彫が浅く、鬼面・人面に近い印象である。また、本来の「獅子・狛犬」の形式を踏襲しているため、吽形の頭部には角があるものがある^{註2}（註2）。一宮の中山神社（写真5）、総社の総社宮の吽形がそれである（写真6）。石工の名前が刻まれており、大阪で作られた狛犬であるとわかるものには、中山神社（写真1）、阿波の八幡神社（写真2）、近長の八坂神社（写真3）、加茂中原の金刀比羅神社（写真4）があげられる。しかし、八幡神社、金刀比羅神社の狛犬は、大阪の石工の名が記されてはいるが、型式からいうと出雲型座形になるため、分類が難しいところである^{註3}。ここでは、大阪の石工の銘があるため、大阪の狛犬に分類した。

出雲型狛犬

大阪の狛犬の後に続くのは出雲型狛犬である。新庄村の御鴨神社の狛犬（写真13）は、慶應2年（1866）、真庭市美甘の美甘神社の狛犬（写真14）は、明治31年（1898）作製である。市内で確認できる出雲型狛犬の最古のものは、徳守神社の拝殿前の狛犬で、明治40年（1907）の作である。これらのことから、出雲街道を介して徐々に津山市内に伝播してきたものと考えられる。このことは、今後調査を蓄積することによ



写真5 中山神社（一宮） 明和元年（1764）
写真6 美作総社宮（総社） 嘉永6年（1853）

角のある狛犬

註2 上杉千郷『狛犬事典』戒光出版 2001年

註3 倉敷埋蔵文化財センター 藤原好二氏のご教示による。



写真 7 徳守神社本殿前（宮脇町）

石工・不詳
明治 10 年（1877）

写真 8 田神社（下田邑）

石工・津山市二宮石工田淵良次郎
昭和 8 年（1934）

写真 9 佐良神社（一方）

石工・不詳
昭和 9 年（1935）

写真 10 吉田神社（神戸）

石工・津山市二宮工作田淵良治郎
昭和 12 年（1938）

出雲型座形狛犬（1）

り明らかになっていくものと思われる。

出雲型狛犬は、来待石で造られているものがほとんどである。来待石は宍道湖の南に注ぐ来待川周辺から産出される石で、狛犬細工に適した柔らかな石として知られている。江戸時代から明治・大正にかけて大量に造られ、北前船を使って広く日本海側全域に広まった。日本海沿岸で見られる古い狛犬には、このタイプの狛犬が多い^{註4}。しかし、柔らかく細工がしやすい反面、壊れやすく風化が早いという欠点もある。

出雲型狛犬の姿勢には座形と構形（前足を踏ん張り、後ろ足を上に伸ばし今にも飛びかかってきそうな構えの姿勢）の2タイプがある。構形は、市内では確認できなかったが、現在調査中の真庭市、新庄村、鏡野町

註4 ねずてつや『狛犬学事始』ナカニシヤ出版 1994 年

周辺には多数見られる。

出雲型狛犬は、決まった形をコピーしたものであり大阪の狛犬ほどの個性はないが、手彫りであるため、当然のことながら個体差はある。外見は、頭が比較的大きく四角い感じで獅子舞の獅子頭のような印象をうける。耳は垂れて長く、尾は蠟燭の炎の様にまとまって立ち上がる。牡丹の絵が施された碁盤上の台座がセットになる。

尾道型狛犬

尾道型狛犬は、長く伸びたするどい犬歯をもち、尻尾は刺々しく逆立ち、耳が横に大きく突出するもので、座形・構形・玉乗り形の3タイプがある。市内で座形に属するものは、上之町の大隅神社の狛犬（写真 15）である。構形は一宮の中山神社（写真 17）、宮尾の八



写真 11 瓜生神社（瓜生原）

石工・不詳
昭和 15 年（1941）

写真 12 千磐神社（千和）

石工・不詳
昭和 16 年（1942）

出雲型座形狛犬（2）

写真 13 御鴨神社（新庄村）

石工・伯州石工文四郎
慶應 2 年（1866）

写真 14 美甘神社（真庭市美甘）

石工・不詳
明治 31 年（1898）

出雲型構形狛犬



写真 15 大隅神社 (上之町)
石工・備後尾道市助
明治 2 年 (1869)



写真 16 八幡神社 (宮尾)
石工・不詳
明治 40 年 (1907)



写真 17 中山神社 (一ノ宮)
石工・不詳
明治 41 年 (1908)

幡神社の狛犬 (写真 16) がそれにあたる。広島県や岡山県南に多く見られる玉乗り形狛犬は、今回の調査では確認できなかった^{註5}。箱座には、格挟間あるいは牡丹装飾を施すものが多く、大隅神社は格挟間、八幡神社・中山神社のものには牡丹装飾が施されている。

大阪の狛犬・出雲型狛犬の混在期に入ってきた尾道型狛犬は、上之町の大隅神社の狛犬が明治 3 年 (1870) で最も古い。台座には「備後尾道市助」の銘が入っている。この「備後尾道市助」は、笠岡市園井の諏訪神社、浅口市鴨方町本庄の大歳天神社の狛犬を彫った「尾道石工市村定助」のことではないかという見解もあ

註 5 藤原好二『倉敷の歴史－倉敷市史紀要－第十七号備中南部における石製宮獅子～尾道石工の影響を中心に～』倉敷市教育委員会 2007 年と藤原好二氏のご教示による。

る^{註6}。両者とも明治 12 年 (1879) の作で、大隅神社と年代的にも近いことからその可能性は高いと思われる。

岡崎型狛犬

岡崎型狛犬は、現在、日本各地どこへいっても確認できるタイプである。市内でも多く見られ、昭和 10 年以降の狛犬は、ほぼ岡崎型といってもよく全体の半数近くを占める。この狛犬は、愛知県岡崎市で生まれ、神殿狛犬の様式を現代風にアレンジしたものである。この狛犬が全国的に広まった理由としては、岡崎現代型の生みの親といわれている石工・酒井孫兵衛 (6 代目) がオリジナルの狛犬造りに情熱を燃やし、金石神社 (西尾市) の狛犬を皮切りに、試行錯誤の末に岡崎

註 6 同上



写真 18 福本神社 (美作市福本)
石工・酒井孫兵衛
大正 13 年 (1924)



「酒井孫兵衛」銘のある狛犬



乙川八幡社 (愛知県半田市)



業葉神社 (愛知県半田市)

(写真提供: 田中義人氏・田中智子氏)

愛知県半田市の狛犬



写真 20 西幸神社(美咲町西幸) 昭和 7 年(1932) 出雲型座形
写真 21 高良神社(押入) 昭和 14 年(1939) 岡崎型座形

写真 22 八頭神社(桶屋町) 平成 11 年(1999) 岡崎型座形
写真 23 青柳神社(青柳) 平成 13 年(2001) 岡崎型座形

石隆銘のある狛犬と岡崎型狛犬

現代型の雛形を造りあげた。割り寸など、この狛犬の「制作マニュアル」を自分の弟子のみならず、広く岡崎の石工仲間に公開したため、あっという間にこのタイプの狛犬が広まったようである^{註7}(註 7)。「石匠酒井孫兵衛」は、8 代目まで続いた愛知県岡崎市の石工である。寛政 13 年(1636)、3 代将軍家光が氏神である伊賀八幡宮の社殿大造営に伴い神橋の修理のため、攝津国から招かれ、後に渡り職人として岡崎に住み着いたのが祖である。大正時代になると、岡崎市周辺でも狛犬の奉納が急激に増えた。

美作市福本の福本神社(賀茂大明神)には、大正 13 年(1924)に奉納された酒井孫兵衛の狛犬がある。年代や姿形から、6 代目~8 代目の作品であると思われる。この狛犬を寄進した岡崎市の水島傳助・せう夫妻の親戚筋の方が美作市に在住で、お話を伺うことができた。当時この二人は岡崎市で石材業を営んでおり、実家がこちらにあるという縁で狛犬と灯籠を寄進されたとのことである。貴重なお話を聞くことができ、感謝申し上げたい。酒井孫兵衛との関連については現在調査中である。

また、愛知県半田市の狛犬には、酒井孫兵衛の影響があると思われる狛犬が多く見られる。

出雲型から岡崎型へ

県北部地域の狛犬の中には、「石隆」の銘が入ったものが 6 対ある。美咲町西幸の西幸神社(写真 20)、津山市押入の高良神社(写真 21)、真庭市下砦部の八幡

註 7 たくみみつよし『狛犬かがみ』バナナブックス 2006 年

神社、新見市豊永宇山の岩山神社、美作市豊国原の五座神社の狛犬にはすべて「石工石隆」と刻まれてある。この中では、西幸神社の来待石製の出雲型座形狛犬が昭和 7 年(1932)で最も古い。この狛犬以降、石隆の狛犬はすべて岡崎型に変わる。西幸神社の次に古いものが、押入の高良神社で昭和 14 年(1939)作である。昭和 7 年から昭和 14 年の 7 年の間に出雲型から岡崎型へと変わっていったことがわかる。「石隆」は、現在も「石隆石材」として市内で営業されているので、関係者の方にお話を伺ったところ、昭和 7 年頃には岡崎市と流通があったということで、岡山県内でも早くに岡崎型狛犬を取り入れていたことが確認できた。また、美作周辺の狛犬を見ると、終戦前後から昭和 26 年までの狛犬と昭和 52 年以降の狛犬とでは、スタイルに若干の違いが見られる。前者の狛犬は、戦時下の時代背景から厳つく威嚇するような姿形のものが多く似通った形をしているが専門的な職人を雇って手彫りで造られて



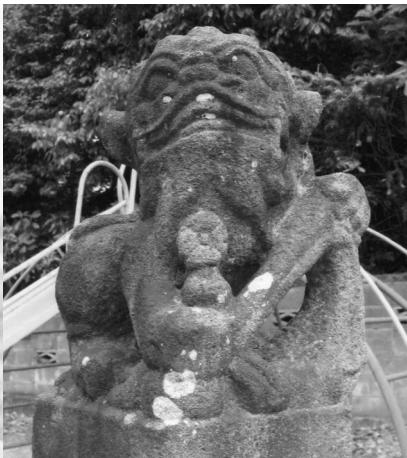
高田神社鳥居前の備前焼狛犬平成 8 年(1996) 当時
(写真提供: 岩本えり子氏)



八頭神社稻荷宮（桶屋町）



近長の公園（写真提供：奥卓真氏）



近長の公園

尾道型狛犬

いたため、個々に違いが見られる。後者になると工場で造られたり、中国から輸入されたものになり、個体差がでにくくなっている。(写真 22・23)

備前焼狛犬

市内唯一の備前焼狛犬だった上横野の高田神社鳥居前の狛犬は、平成 17 年(2007)4 月頃、何者かによって盗難の被害にあった。今もその行方は杳として知れず、帰参が待たれる。平成 17 年 7 月には備前焼狛犬があった場所に岡崎型狛犬が奉納されている。

その他の狛犬

八頭神社の摂社稻荷宮には、体長 20 センチのミニ狛犬が奉納されている。構形の姿勢で材質は砂岩であ

国土地理院承認 平14緑旗 第149号

狛犬分布図（1764年～1900年）

△ 大阪の狛犬
★ 尾道型



図 1 津山市内狛犬分布図（1764 年～1900 年頃）

国土地理院承認 平14緑旗 第149号

狛犬分布図（1907年～1938年）
□ 出雲型
★ 尾道型
△ 大阪の狛犬

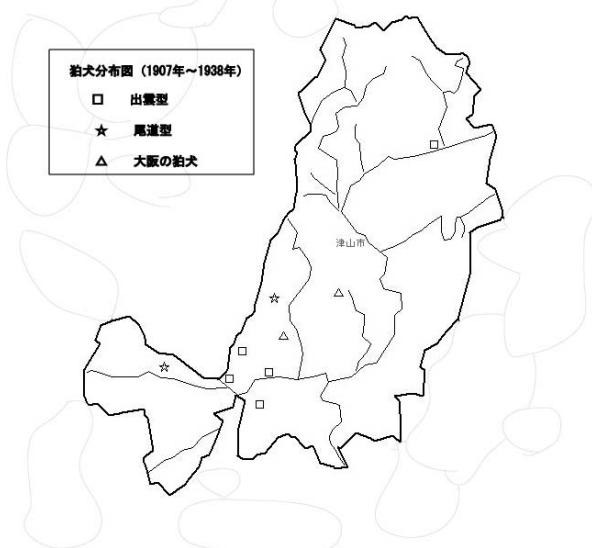


図 2 同（1907 年～1938 年頃）

狛犬分布図（1939年～2007年）
○ 岡崎型
△ 大阪の狛犬
□ 出雲型



図 3 同（1939 年～2007 年頃）

る。古いものかも知れないが時期の特定はできない。また、近長の公園には変わった形をした石造物がある。両方の口が開いた「阿－阿」型で、胸には瓔珞(ようらく)というベルト飾りがあり、中国獅子であることが判る^{註8}。設置された年代は不明である。

狛犬の分布

津山市内の狛犬の分布を年代別に図1から図3に示した。

図1は、1764年～1900年頃の津山市内の狛犬分布図である。これをみると、大阪の狛犬が市内全域に満遍なく所在していたことがわかる。そして、図2の1907年～1938年頃になると、狛犬奉納のピークは過ぎ、数が激減する。この時期は、大阪の狛犬・出雲型・尾道型が混在するが、大阪の狛犬に変わり、出雲型が一時増える。それから、図3の1939年～2007年頃になり再び狛犬奉納の機運が高まり、その時に入ってきた岡崎型狛犬が大半を占めるようになった状況が読み取れる。

まとめ

小稿では、津山市内に分布する主に4タイプの狛犬を紹介し、その変遷を辿った。その結果、市内には大

註8 たくみつよし『狛犬かがみ』バナナブックス 2006年

番号	神社名	所在地	石工銘	寄進年	体長・幅(cm)			雌雄	保存状態	姿勢	型	材料	
1・5	中山神社①	津山市一宮	泉州住石工 小鷦市兵衛	明和元年 (1764年)	高さ (阿) (吽)	73cm 74cm	幅 (阿) (吽)	64cm 64cm	阿：雄 吽：雌	良い	座	大阪の狛犬	花崗岩
2	八幡神社	津山市阿波	石工泉州貝掛住人 里山源助	弘化2年 (1845年)	高さ (阿) (吽)	72cm 72cm	幅 (阿) (吽)	42cm 42cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	大阪の狛犬	花崗岩
3	八坂神社	津山市近長	大阪石工石光	明治21年 (1889年)	高さ (阿) (吽)	86cm 86cm	幅 (阿) (吽)	41cm 41cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	大阪の狛犬	花崗岩
4	金刀比羅神社④	津山市加茂中原	石工 泉州貝掛住人 里山源助	不明	高さ (阿) (吽)	60cm 36cm	幅 (阿) (吽)	60cm 36cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	大阪の狛犬 (出雲型座形)	花崗岩
6	美作総社宮	津山市総社	不明	嘉永6年 (1854年)	高さ (阿) (吽)	81cm 91cm	幅 (阿) (吽)	63cm 63cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	大阪の狛犬	凝灰岩
7	徳守神社	津山市宮脇町	不明	明治40年 (1907年)	高さ (阿) (吽)	79cm 77cm	幅 (阿) (吽)	64cm 62cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	座	出雲型	来待石
8	田神社	津山市下田邑	津山市二宮石工 田淵良次郎	昭和8年 (1934年)	高さ (阿) (吽)	77cm 77cm	幅 (阿) (吽)	61cm 61cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	座	出雲型	来待石
9	佐良神社	津山市一方	不明	昭和9年 (1934年)	高さ (阿) (吽)	89cm 86cm	幅 (阿) (吽)	71cm 71cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	座	出雲型	来待石
10	吉田神社	津山市神戸	津山市二宮工作 田淵良治郎	昭和12年 (1938年)	高さ (阿) (吽)	78cm 59cm	幅 (阿) (吽)	78cm 59cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	座	出雲型	来待石
11	瓜生神社	津山市瓜生原	不明	昭和15年 (1940年)	高さ (阿) (吽)	59cm 59cm	幅 (阿) (吽)	44cm 44cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	座	出雲型	来待石
12	千磐神社	津山市加茂知和	不明	昭和10年 (1935年)	高さ (阿) (吽)	79cm 79cm	幅 (阿) (吽)	51cm 51cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	座	出雲型	来待石
13	御鴨神社	新庄村梨瀬	伯州石工文四郎	慶應2年 (1866年)	高さ (阿) (吽)	96cm 92cm	幅 (阿) (吽)	51cm 56cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	構	出雲型	来待石
14	美甘神社	真庭市美甘	不明	明治31年 (1898年)	高さ (阿) (吽)	91cm 91cm	幅 (阿) (吽)	65cm 56cm	阿：不明 吽：不明	風化している。	構	出雲型	来待石
15	大隅神社	津山市上之町	備後屋道市助 (市村定助?)	明治2年 (1869年)	高さ (阿) (吽)	133cm 128cm	幅 (阿) (吽)	76cm 72cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	尾道型	花崗岩
16	宮尾八幡神社	津山市宮尾	不明	明治40年 (1907年)	高さ (阿) (吽)	76cm 55cm	幅 (阿) (吽)	76cm 55cm	阿：不明 吽：不明	良い	構	尾道型	花崗岩
17	中山神社②	津山市一宮	不明	明治41年 (1908年)	高さ (阿) (吽)	150cm 150cm	幅 (阿) (吽)	103cm 103cm	阿：不明 吽：不明	良い	構	尾道型	花崗岩
18・19	福本神社	美作市福本	酒井孫兵衛	大正13年 (1924年)	高さ (阿) (吽)	89cm 89cm	幅 (阿) (吽)	76cm 76cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	岡崎型	花崗岩
20	西幸神社	美咲町西幸	津山石隆 彫刻	昭和7年 (1932年)	高さ (阿) (吽)	73cm 74cm	幅 (阿) (吽)	45cm 46cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	出雲型	来待石
21	高良神社	津山市押入	不明	昭和14年 (1939年)	高さ (阿) (吽)	70cm 70cm	幅 (阿) (吽)	48cm 48cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	岡崎型	花崗岩
22	八頭神社	津山市桶屋町	不明	平成11年 (1999年)	高さ (阿) (吽)	70cm 70cm	幅 (阿) (吽)	54cm 54cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	岡崎型	花崗岩
23	青柳神社	津山市青柳	不明	平成13年 (2001年)	高さ (阿) (吽)	66cm 66cm	幅 (阿) (吽)	44cm 44cm	阿：不明 吽：不明	良い	座	岡崎型	花崗岩

本書掲載狛犬一覧表

阪・島根・広島・愛知4府県の狛犬が、入ってきていることが分った。そこから見えてきた狛犬の変遷は、「大阪の狛犬」から「尾道型」・「出雲型」となり、現在主流となっている「岡崎型」へと移り変わったことが判明した。今後も調査を積み重ね、成果をより確実なものにしていきたいと考えている。

次回は、真庭市・鏡野町周辺で多くみられる出雲型狛犬の流れを追い、津山市の狛犬にどういった影響をもたらしたのかについて言及したい。

小稿を書くにあたって、倉敷埋蔵文化財センターの藤原好二氏には狛犬の形態などの基本的な見方からご教示いただいた。徳守神社では、狛犬を観察する機会を与えていただいた。石隆石材の方には岡崎型狛犬に関するお話を聞かせていただいた。美作市では、滝の宮神社の関係者にお世話をした。奥卓真氏、岩本えり子氏、田中義人・智子夫妻には写真を提供していただいた。また、津山市教育委員会文化財課の行田裕美、岩本えり子、近藤有紀、さらに兄の田渕智也には現地調査でお世話をした。

末筆ながら御礼申し上げます。